

り。三箇屋の六用集にも、如意坊泉野とありて、因幡藥師の別當なりしが、能登國珠洲郡三崎須々神社の別當天台宗高座山高勝寺、明治二年神佛混淆御發止に付き、住職の偷復飾し、寺號廢止相成處、檀家の者共歎願の次第有之に付き、翠雲寺をば明治八年三崎へ移轉し、元・高勝寺の佛閣を其の儲寺院となし、傳來の佛像佛器悉く引請け、因幡藥師は卯辰最勝寺へ遷座せり。

○岾松山淨安寺

淨土宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開山貞蓮社白譽岾松上人天正三年創立。白譽上人は生國尾州にて、高德公加賀御入部に付、御跡を慕ひ罷越、最前故寺町に而寺屋敷拜領仕、四十年罷在候處、微妙公御代御用地に被召上、爲代地元和元年石川茂平取次を以、泉野に於て千百七十五歩拜領被仰付、于今罷在。とあり。天明六年の由來書に、門前家數五軒有之、此の門前地は拜領地之内なるよし記載す。當寺本尊彌陀佛は大像に而、金澤にての大佛と云へり。

○淨安寺中稱名院

稱名院は、享保の頃迄ありしかど、其の後廢寺と成りたる

にや。咄隨筆に云ふ。淨安寺納所稱名院の物語に、或人妻の死しけるを、且那寺の卯塔場に土葬にして置きけり。年月を経て後妻を呼びけるが、後妻のする事一圓心に不應にや、初の妻は是も能く、彼もよかりしと云ひける程に、後の妻殊の外恨みて、かくまで心を盡し身をもをしますつかへ侍るに、我等のする事一つとして御氣に入候はず。初の妻なる人はいかに仕へ給ひけん、血の涙を流しかなしみけるが、遂に病の床に臥して、日を經月を重ねても枕をあげず。今を限りとぞ見えし。其比件の且那寺より少々用事も有之程に、黄昏の頃より咄に來られよと申越、彼男即ち行きけるに、和尚對面し、其方妻女の墓へ毎夜黒雲覆ふとひとしく、墓の内鳴動してさげぶ事限りなし。大形四つ時頃也。今夜是を見よと宣ふ。彼男あやしく思ひ、和尚と伴ひ墓の前に至る。案の如く亥の刻許と思ふ頃、黒雲一村松に懸り、墓の上へ落ち懸る。彼男刀を抜きて切拂ひければ、消えて跡なくなりけり。かゝる處に私宅より使を走らせて、後妻唯今死去のよしを告げ來る也。後妻が一念の來るなるべし。後に墓を掘り見れば、前妻の貌とおぼしき所、搔

きさきたるが如くに成りて有りしと也。生靈の死人に付きしと云ふ物なれば、是こそあちらこちら也と、享保十年の十一月下旬に稱名院の語られしと、出口宇兵衛咄也。とあり。

○本覺山安住寺

天台宗也。由來書に云ふ。當寺開基、慶長元年四月僧舜榮創立、美濃國野口与云所之任人西尾隼人爲菩提所。然所西尾隼人微妙公被召抱。依之當寺先住舜榮金澤へ移住、泉野寺町今之寺地に寺造立、寛永年中東照宮金澤に御勸請に付、看坊頭被命相勤、爲役料現米十石賜之。とあり。

○瑞龜山松月寺

曹洞宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開祖白峯和尚。文祿二年齋藤刑部越前國に於て被取立造營有之處、利家卿加州御入國之後、金澤へ引越、則齋藤刑部より言上被致、於小立野二十七間に四十七間之寺屋敷相願拜領被仰付、利常卿之時御用地被召上、元和元年泉野に於て先歩敷之通り替地拜領被仰付、石川茂平・淺野將監・西村右馬助三人奉行に而被打渡。とあり。龜尾記には、松月寺開山松林坊也。松林坊は文祿年中美濃大垣の城主伊藤長門守・同彦兵

衛在住の時より懇にして、常に茶席の女なりしに、慶長三年長門守金澤へ來れる時、松林坊も同道にて、長門守父子三人、金澤町人越前屋某方に寓居せり。然るに長門守煩ひ出し、病中看病料としてせがれ牛之助(長)へ利常卿より千石賜はり、後權兵衛と改名す。長門守は翌慶長四年遂に歿し、松林坊に葬禮等を營ましむべしと遺言す。則ち泉野にて寺地拜領し、伊藤氏より佛閣建立、松林坊を住職とす。後命に依つて松月寺と號す。故に伊藤氏は開基檀那也と云ふ。とあり。今按ずるに、龜尾記の傳説は、恐らくは過聞なるべし。右伊藤氏の元祖長門守盛景は、美濃大垣の城主にて、三萬五千石を領し、其の子圖書利吉若名を彦兵衛と云ひ、大垣の城主の處、後領地を沒收せられ、元和六年金澤へ來り、同九年二千石を賜ふ。其の子牛之助勝良、遺知の内千三百石賜之。と家譜に載せたり。龜尾記の傳説と甚だ齟齬す。

○中興至岸和尚傳

貞享二年の由來書に云ふ。松月寺中興至岸和尚は、利常卿甚御懇にて、毎度御意に依て登城致し、不時に被召時は馬上